フォーラム「現代社会と生涯学習」

震災から学ぶもの

日　時	10月６日（木）午後１時30分～４時30分
会　場	滋賀県庁東館　７階大会議室

開会挨拶

来賓挨拶

講　　演

「東日本大震災とボランティア活動」

阿部　圭宏（しがNPOセンター副代表理事）

「減災を考える」

山﨑古都子（滋賀大学名誉教授）

主催　滋賀県社会教育研究会

滋賀大学生涯学習教育研究センター

後援　滋賀県教育委員会

滋賀県社会教育委員連絡協議会

滋賀県公民館連絡協議会

講演　　東日本大震災とボランティア活動

阿部　圭宏（しがＮＰＯセンター副代表理事）

はじめに

私は、震災対応が専門ではなくて、今回の東日本大震災で初めて災害の活動をさせていただいています。その中で感じたことも含めてお話しできればと思います。

いま、大きな被害を受けておりますのは、岩手、宮城、福島です。福島の場合は、通常の津波、地震以外に原発というもう一つ大きなものを抱えているという状況がありますので、ちょっと違うかも分かりませんが、私が経験していますのは、岩手県です。ですから、今日の話は、被災地全体ということではなくて、一部だということを最初にお断りをしておきます。

１．ＮＰＯとは

皆さんは、生涯学習の担当をされているわけですから、ＮＰＯ、ＮＧＯというのは、よくご存じだと思いますが、この話からさせていただきたいと思います。

阪神・淡路大震災は1995年ですから、この中にも阪神・淡路大震災を経験されたり、そのときの災害の対応で現地へ行かれた方もたくさんいらっしゃるかも分かりません。それまでＮＰＯ（民間非営利組織）という言葉は、日本ではほとんど使われたことのない言葉でしたが、それを機に社会に注目をされると同時に「ＮＰＯ法」ができる一つのきっかけになったエポックというふうに言えるかも分かりません。

いま、全国にＮＰＯ法人というのは、だいたい４万２千ぐらいあります。滋賀でもだいたい510ほどのＮＰＯ法人があります。そこでは、いろんなテーマで活動が行われています。例えば生涯学習を推進するＮＰＯがあったり、まちづくり、環境保全、災害対応、あるいは子育て、高齢者の支援などです。

私たちのしがＮＰＯセンターは、そういう個々の課題に対応するということよりも、いろんな活動をやっているＮＰＯの支援をするＮＰＯです。一般的に、それを中間支援組織、intermediaryという言い方をしています。

2009年５月に立ち上げまして、まだまだ弱小のＮＰＯです。９月22日に法人格を取って、いまＮＰＯ法人になりました。われわれは大きく市民活動と、もう一つは、最近滋賀県内でも非常に注目をされていますまちづくり協議会、いわゆるコミュニティーをベースにしたようなまちづくりの組織のサポートもやっていこうと考えています。

それから、いま、行政がいろいろとやられている協働推進、そういう仕組みづくりをメイーンに活動しています。ただし、今年と来年につきましては、災害ボランティア対応も大きなミッションとして活動しています。

２．ＮＰＯとボランティア

ＮＰＯとボランティアですが、行政の方は、ＮＰＯよりもボランティアの方が、たぶん好きな言葉だと思います。

しがＮＰＯセンターでも、この９月から人を雇っています。有給のスタッフがいるわけです。ＮＰＯで働いているのは、ボランティアばかりではなくて、有給のスタッフもいます。ボランティアを抱えないＮＰＯもたくさんあります。

ボランティアは、どちらかというと欧米のキリスト教に基づくところから入ってきた言葉です。日本にはもともとそういうのはなかったかというと、仏教とかには、喜捨とか報恩とかいった言葉もありますので、必ずしもキリスト教の博愛精神に基づいたものだけではないだろうと思います。

『広辞苑』にボランティアという言葉が載ったのは、昭和40年代ぐらいらしいです。皆さんはどうでしょう。ボランティアというと、どんなイメージを持たれますか。

高校でボランティアの義務化という話が、何年か前にあったと思いますが、義務化するものはボランティアでは本来ないのです。ボランティアは、あくまで自発的に、自分の意志で動くということが大切で、それを自分のお金と時間を使ってやることがボランティアだと言われています。

これが日本に入ってきたときに、ボランティアを奉仕活動と訳した人がいるのです。奉仕活動と訳した途端に自発的に動くという意味合いが薄まって、ただで働くことがすべてボランティアのように言われてしまったのかなという気がしています。

今回、災害ボランティアといいますか、いまの被災地に入られている方は、実は誰に言われて行っているわけではなくて、まさに自発的に行かれているので、ある種、ボランティアの原点のような気がします。

ただ、難しいのですが、ボランティアというのは、あくまで個人の活動です。個人そのものをいうので、組織の中で活動するということと、ボランティアが自発的に動くということは、実は難しいところがあります。だから、自己実現が目的になっていると、自分の活動が組織の論理と合わなくて、ボランティア活動をどんどんやめていくということも現実にはあるわけです。ただ災害ボランティアの場合は、後で話をしますが、自分の好き勝手をやっていて、災害ボランティアではどうなるのかという話になるので、そこは災害ボランティア独特の世界があると言えるかなと思います。

３．ボランティア

ボランティア元年は、阪神・淡路大震災のときです。この時、滋賀県の人口とほぼ匹敵するような130万人もの人たちが、神戸を中心とする被災地に行きました。これは、何とかしなければとか、自分が行けば何かできるかもしれないと考えて、着の身着のまま、あらゆる世代の人が行かれたということは、非常に特徴的だと思います。

交通手段も、例えば阪急の西宮北口はすぐ復旧しましたからここまで行って、そこから神戸に向かって歩かれる方がたくさんいたということで、これは、いまの東北の状況とかなり交通事情も違いますし、都市部で起こった災害ですから、人がアクセスしやすかったという面があるのかも分かりません。

ボランティアにもいろんな専門的なことがあります。例えば、手話サークルであるとか、要点筆記とか、通訳とか、そういうことをされているボランティアの方というのは、専門的な能力がいるわけです。

しかし、災害のときに行かれた方は、当然専門的な知識を持っている方も行かれていますが、例えば、救援物資の仕分けであるとか、家の片付け、がれきの処理、泥出しといったものもありますし、修理、ごみの処理、情報連絡、子守、話し相手、炊き出しなどいろんな活動があるわけです。ですから、この時には、素人ボランティアが、たくさん被災地に入ったと言えるかもしれません。

日本社会では、ボランティアといっても、みんな経験がないので、どちらかというと行政がお膳立てをして普及してきたという現実にはあるわけです。社会福祉協議会には、1980年ぐらいから全国的にボランティアセンターというのができます。そこは、福祉の活動をボランティアの力で支えるということで、どちらかというと福祉系のボランティアの人たち、あるいはボランティア団体の人たちが、ボランティアセンターに登録したり、活動しています。また、そこで講座を受けた人たちが、自分たちでグループをつくって活動するという場合が多かったわけです。

もう一方は、教育委員会サイドでもあります。一つは青少年です。例えば、ＹＭＣＡとか、ガールスカウトとか、ボーイスカウトとかいう活動の指導もそうかも分かりません。子どもたちにいろんな野外活動の指導をします。こういうボランティアの姿は認識されていたと思いますが、ボランティアは、そういう活動をされていたということです。

その担い手はといいますと、教育は別にしますと、福祉系のほとんどの担い手というのは、だいたい主婦層でしたし、どちらかというと汗と涙の根性の物語とか、自己犠牲的なところが多かったわけです。

これが、震災を機に新しい価値観で若者とか、シニア層とかが入ってきたと同時に、これもボランティアなんだということでボランティアの幅が非常に広がりました。このことは、ある時期、生涯学習の幅が広がったのと同じような感じかと思います。

実際、ボランティアの参加意欲は非常に高いです。内閣府の調査でも、だいたい国民の３分の２ぐらいは、ボランティアに可能な限り積極的に参加したい、聞かれたらみんなそう言います。でも、実際に参加されているのは、ぐっと落ちるわけです。

ボランティアの活動領域ですが、最近は行政もボランティアを募集したりしますが、やっぱり行政がボランティア募集というと何かうさんくさいですね。一番ボランティアが活動できる領域というのは、やっぱりＮＰＯのような組織だと思います。

もう一つが、施設ボランティアというのがあります。これは、社会福祉施設、あるいは病院、博物館のような文化施設にボランティアがたくさん関わっています。例えば、滋賀県でも近代美術館に、ボランティアが関わったりしていますし、皆さんも病院に行かれると、車いすを押してくれたり、いろんな窓口へ案内してくれるボランティアがいたりということがあります。

もう一つが、災害ボランティアです。災害ボランティアと言われるようになったのは、阪神・淡路大震災以降です。それ以降、いろんな地震とか、大雨の被害等で、各地にボランティアを受け入れる仕組みができて、災害ボランティアというのが定着したと思います。

ただ、災害ボランティアは難しいですね。滋賀県でも、阪神・淡路大震災以降、災害ボランティアの会が何カ所かでできました。立ち上がったときは、いろいろ研修をやったり、訓練をやったりするのですが、日ごろは活動がないのです。日常活動がないとどうしても活動がどんどん停滞していきます。そういうことで最近は、災害支援を専門にやられているＮＰＯというのは、滋賀県ではあまり聞かないというのが実は現状です。

三重とか、京都とかは、ＮＰＯで災害のことをやっておられるところもありますので、われわれもぜひこの機会に、そういったネットワークをつくりたいと思っております。

４．東日本大震災とボランティア

東日本大震災のことに入りたいと思います。現地の応援ということで言えば、例えば湖南の４市は、交代で大槌町に福祉の支援であるとか、行政事務の支援であるとか、初期のころは給水活動と

かで入られていました。今回の地震は、確かに大きかったです。私は、たまたま旧志賀町で会議がありまして、知り合いから電話がかかって、すごい地震が起こっているよということで知りました。規模も、9.0ということを言っていますが、当初は8.3とか、8.4とか言っていたと思います。それと、余震もどんどん起こっています。いまでも震度５ぐらいのものが、起こっています。

地震の活動期に入ったと言われていますので、そういう意味では滋賀県も、これから東海、東南海、南海というのが連動して、東日本のようなかたちのものが起こったら、同じような被害が、内陸部ですけれども、可能性としてはあるわけです。琵琶湖の周りにたくさん断層がありますし、そういう心配はどこにでもあるということです。

人的被害が非常に多くて、行方不明の方を含めると２万人ぐらいの方がお亡くなりになっているということです。この数が、当初３万に近かったと思います、両方を合わせると。それが、どんどん減っていって、いま、だいたい２万弱ぐらいになっています。一方、物的被害もすごいです。全壊、半壊、一部損壊とか、そういうのを入れると、多くの県にまたがっているということです。

それから、滋賀県に逃げておられる避難者も、だいたい 400人強いらっしゃいます。これも福島の方だけじゃなくて、自主避難を含めると、東京の方がいたりとかします。だから、被災地の支援ということと合わせて、滋賀県に避難されている方をどう支援していくのかということも大きな課題になっています。

避難所ですが、現地では一段落していて、仮設住宅にほとんど拠点が変わってきております。これまでは、避難所生活ですので、それをどうサポートしていくのかということが、一つの大きな課題だったわけですが、仮設住宅に移られると、その分野でどうしていくのかが問題になっているということです。

普通、仮設であれば２年なのですが、今回は３年という話も出ていますし、まだ復興計画自体ができていないので、どんなかたちでもう一度まちをつくり直すかという問題が大きいので、たぶんここに住まわれている皆さんは、不安を抱えておられるということです。

政府の動きを見ていると、何で進まないのかなと自治体の皆さんもいらいらされていると思います。一方、社会福祉協議会であるとか、ＮＰＯというのは、割と早くから動いています。全国社会福祉協議会というのがありますが、そこも早く支援体制を決めまして、社協のブロックで支援をしていこうとしています。

近畿ブロックは、宮城県の支援です。滋賀県は、広域連合の関係で福島を支援していますけれども、社協の近畿ブロックは宮城県の支援をしています。宮城県内の市町村に設置されている災害ボランティアセンターに職員を派遣したりしていました。これは、県内の市町村の社協の職員さんと、県の社協の職員さんが、交代で行っていました。９月ぐらいまでは、そういう体制でいかれていたと思います。

一方、ガソリンがないとか、行方不明の方が多いので、早く行くと捜索の邪魔になるので、ボランティアに行きたくても待ってくださいというのが、いろんなネット上でも流れていました。３月中は、そういう意味では、われわれも動けなかったし、県の社協も動けなかったんですが、４月18日を皮切りに、県の社協は３回ボランティアバスを宮城県に派遣しています。１回目はそうではなかったのですが、２回目、３回目と同時募集されて、40名定員のところに130名の応募があったというふうに聞いています。だから、行って何とかしたい、ほっておけないと思われた方が非常に多かったのかなと思います。

それと全国的には、東日本大震災支援全国ネットワークというのが３月末に立ち上がりました。

これは、全国のＮＰＯを中心とする団体が、主にネット上でいろんな支援の情報をその中で交換しましょうということになっています。

ここのホームページを見ますと、いまどんなかたちの支援が行われているとか、あるいはボランティアバスがどこから出ているとか、あるいはこういった助成金とか、支援金が、こういうところから出ていますよ、物資はどうだとか、そういった情報が分かります。

あるいは、このネットワークのメーリングリストがありまして、その中では常にこういった物がないとか、うちは今度こんなのをやるので参加してくださいとかいうのが、各団体が独自に情報発信したものが流れているということです。

それから、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議というのがあります。これは、通称、支援Ｐと言います。中越沖地震のとき、都市部と違って、災害ボランティアセンターを県とか市町村の社会福祉協議会が中心となってつくろうとするのですが、実際には、どういうかたちでつくったらいいのか、ボランティアセンターをどのように回していったいいというノウハウが、あまりないのですね。

いまは、どこでも研修をしたりしてどんどん勉強するようになってきていますが、そういったことをコーディネートする専門家が要るということで、災害ボランティアセンター運営の支援員を福島、宮城、岩手の県の災害ボランティアセンターに１名ずつ９月末まで常駐させています。それと同時に、社協のブロック派遣の職員と併せて、支援Ｐがコーディネートしたスタッフがボランティアセンターの運営に入っています。ここのお金は経団連が出していたりします。

シーズというのは、「市民活動を支える制度をつくる会」という名称ですが、「ＮＰＯ法」ができるときのロビー活動をやっていた団体です。今年の６月に「ＮＰＯ法」が、かなり大幅な改正をされ、認定ＮＰＯ法人という寄付税制の仕組みも大幅に変わったので、それのロビー活動をやっていた団体ですが、シーズが、緊急にいろんな提言活動をこのときもやっています。

それから、特にＮＧＯと呼ばれている国際協力をやっている団体です。例えば、紛争地へ入っていたりとか、途上国の援助をやっているということで、割と炊き出しとかこうした活動には慣れているんです。こうしたＮＧＯの連合体であるＪＡＮＩＣとか、Japan platformは、参加の団体が支援先を決めて、そこに継続的な支援に早くから入りだしたということです。

５．滋賀県の支援

では、滋賀はどうだったかというと、独自にいろんな活動をやられている団体はあるのですが、組織的にあしたから行きましょうかということにはならないです。ノウハウもないし、お金もないし、人手もないということです。

しがＮＰＯセンターでは、取りあえず４月19日に県社協の協力を得て、現地報告災害ボランティアの説明会ということで、現地報告会をやったんです。緊急の呼びかけにもかかわらず、40人ぐらい集まっていただきましたが、その中の10名くらいはどうしても現地へ行きたいということでした。

ボランティアバスを出されたところが、市町村の社協でもありますが、それ以外に東近江の能登川地区のまちづくり協議会が、５月の連休のときにボランティアバスを運行されました。その後、９月、10月、11月と気仙沼の大島へ、ボランティアバスを出しておられます。まちづくり協議会のようなところが出しているのは、非常に珍しいケースだと思います。

では、しがＮＰＯセンターは、何をしているのかですが、なかなか難しいんですね。ボランティアバスというのは、向こうのニーズにしたがって人を送り込んで、向こうでの作業をしていくとい

うことですが、ＮＰＯらしく支援先とか、支援メニューを決めてやったほうがいいかなというのがわれわれの思いだったのです。ただ、向こうとつながらないと、勝手にこっちが押しかけていくわけにはいきませんので、それで一応支援先を岩手県の大槌町に決めたわけです。

なぜ大槌町かということですが。支援Ｐで岩手県に常駐している支援員の方が、石井布紀子さんという西宮の方です。その方は、阪神・淡路大震災にあわれて以降、災害のことをメインに活動している方で、われわれの仲間です。その方を頼って行こうということになり、石井さんに現地とつないでいただきました。

大槌町には、グッドネーバーズ・ジャパンというＮＧＯが入っていまして、鮭プロジェクトというのを６月ぐらいからやっていたのです。これは何かと言うと、岩手県というのは、北海道に次ぐサケの産地で、大槌町もサケの産地で、沿岸部に漁協の市場や加工施設、それから水産会社、関係会社が二十数社ありましたが、それが全部被災をして、壊滅状態になっています。それ以外の産業はほとんどないので、サケが帰ってくる川をよみがえらせて、それを一つの復興のシンボルにしたいということをグッドネーバーズ・ジャパンがやられていたので、われわれはそれに協力するかたちで、カムバックサーモンプロジェクトを８月から始めたわけです。

いま、すでに第１期、第２期、第３期と作業をして、４期に来週から入ります。今週の火曜日から実は５期、11月11日から15日に行く人をいま募集中です。これまでは、だいたい応募すると１週間ぐらいで20人定員が埋まるという状況でしたが、だんだん寒くなってきましたので、今回はどうかなと、ちょっと心配をしております。

もう一つが、いわてGINGA-NETプロジェクトへの協力です。これは、岩手県立大学と京都にあるユースビジョンという学生のボランティア活動を支援している団体、それから、さくらネット（先ほどの石井さんのところの団体です）の３者がプロジェクトを組みまして、住田町というところで、旧五葉小学校がいま公民館になっていますが、隣に建っている体育館を一つの拠点にして、夏休み期間中、大学生を沿岸部に派遣しようというプログラムをつくりました。

その中で、滋賀県内の学生を対象にバスを派遣したいということを考えて、社協のふれあい基金の助成を受けて、８月末からちょうど１週間、39名を連れてこのプロジェクトに参加してきました。

それから、もう一つやっています。今年から内閣府のお金で新しい公共支援事業というのが始まっているんですが、その中のモデル事業で、ＮＰＯ災害ネットワーク構築事業というのをわれわれが提案して採択されました。この事業が、いま始まっています。この事業は、さっきも言いましたが、ＮＰＯの災害対応という情報が滋賀県内に一つもないので、例えばこういった活動ができますよということをデータベース化したいということと、実際にそういう専門知識を東北に持っていって支援をしたいということでやりかけたものです。

すでに一つ始まっていまして、９月30日から10月３日まで菜の花プロジェクトネットワークと協力して、福島の須賀川といわきへボランティアバスを出しました。須賀川では、菜種を贈呈しただけだったんですが、いわきでは菜種の種まきをしてきました。この時期じゃないと育たないということもありましたので、これだけをちょっと早めにやらせていただきました。

６．岩手県の状況

それで岩手県の状況ですが、面積は北海道の次に大きくて、被害の大きかった沿岸部（三陸海岸）は中心部からは非常に遠いです。私もあまり東北になじみがなかったんですが、今回、何回か行くうちに本当に大きな県だと思いました。

それと山が深い。内陸部は、ほとんど被災していません。内陸部にいると被災のことは分からない状態です。６月にうちのスタッフと先遣隊で現地での打ち合わせに行ったときに、盛岡に泊まったんですが、盛岡市内は地震が起こったところなんかという感じの状態です。何もそういうことが一切感じられない所でした。一方、沿岸部というのは、本当に壊滅的な所があります。一番ひどいのが、陸前高田市と大槌町です。陸前高田市は、中心部のほとんどがやられていますし、大槌町も役場が被災して、町長さんも流されたところです。

大槌町を見てみますと、死者が801人、行方不明が580人です。これは９月14日のデータです。大槌町の人口は、震災前で１万５千人です。ですから、約１割の方がお亡くなりになっています。非常に大きな被害を受けた所です。大槌町は、ピークのときの人口が２万３千人です。それがこの間、１万５千人に減っているんです。人口が３分の１減っている、すごい過疎化が進行しています。だから、過疎化と高齢化、少子化という日本社会の縮図みたいな所です。沿岸部は大槌町だけではなくて、釜石も、陸前高田も、山田も、宮古も、そして宮城県側もそうです。人口が減ってきていました。この震災で、また減っているんです。

だから、町をどう再興していくかというのは非常に難しい。地震がなくても、これからどうしていくのかというのは、非常に難しい地域だったと思いますが、地震が起こったことによって、どうしていくのかというのは、切羽詰まった問題にたぶんなっていると思います。

７．これからのボランティア活動

先ほど言いましたように、阪神・淡路大震災の時は、ボランティアが130万人です。今回の震災では、９月の初めで70万人ちょっとです。９月末ぐらいまでは、学生は夏休み中ですし、結構ボランティアは多かったです。われわれも入っていた９月の終わりの方は多かったんですが、今後10月以降になると、たぶんこの数ががくっと落ちていくと思います。

確かにニーズも変わってきています。最初のころは、がれきの処理とか、泥出しとか、大量に送り込んで、みんなに肉体労働をしてもらうというイメージだったんですが、いまはほとんど仮設住宅に切り替わっていますので、どちらかというと生活支援の活動になるわけです。すると、よその県からいろんな人が仮設住宅に入っていくというわけにはいきませんので、これからは入り方をいろいろ考えていく必要があるのかなと思います。

９月からだいたいどこも、災害ボランティアセンターを復興支援ボランティアセンターという名前に切り替えています。そこでは、いまのようにボランティアの受け入れの調整と、もう一つは、被災者の生活支援が行われています。これは、生活支援員を岩手県が一括で雇って、各社協に張り付けているんです。そういった人たちが仮設住宅を回ったりして、いろんな生活の相談に応じています。だから、いま、社協は、この二つの仕事を主にやっているということです。

それで、市民としてできることは何なのかということを、先にお話をしたいと思います。緊急救援期、復旧期、復興期に分かれるといわれます。１番の緊急救援期はレスキューです。今回ですと、自衛隊とか、警察とか、消防が、メインで入っています。こういう時期にボランティアが入ったら邪魔になると言われたのです。復旧期は、避難所が開設されて、そちらのサポートが要るので、ボランティアに対するニーズがだんだん出てくる時期です。復興期は、今回の場合、非常に長いです。これは５年、10年のスパンで考えていく必要があるのかなと思います。

ただ今回の場合、神戸のときの状況と比べて出だしが遅かった。それは、ガソリンがなかったとか宿泊先をどうするかとか、食べ物をどうするかということを考えると、行きづらかったのではな

いかと思いますが、その分ちょっと遅れてしまったかなと思います。

市民としてできることを一応三つあげました。一番分かりやすいのはお金です。皆さんは、たぶん寄付をしていただいたと思いますが、寄付には義援金と支援金があります。義援金というのは、直接被災者の手に渡るお金です。

これは、日赤と共同募金にお金がだいたい集まっていて、そこで集約されて各県に配分されます。いま、いくらぐらい集まっているかというと、６月で３千億円です。すごい額ですね。きのう、たまたま日赤と共同募金の額をネット上で見て、足してみたら、３千300億円ぐらいです。最近はぐっと減ってきています。だから、もっともっと義援金は要ると思います。

もう一つが支援金です。われわれＮＰＯのような団体では、これが、やはりないとやっていけません、みんな持ち出しでは継続できません。ＮＰＯ／ＮＧＯで現地にスタッフを張り付けている団体も多くあります。その人たちの生活費とか、給料とか、そういうのを出す必要があります。そういった意味での支援金というのも、非常に大きいと思います。共同募金から、20億円ぐらい出すといっていますし、あと日本財団も出していますし、Japan platformというのも出しています。われわれは、先ほどのカムバックサーモンプロジェクトをやるときに、三菱商事の震災資金の助成を申請して、運よく通りましたので、そこからの助成を受けています。こういうのがあると、なかなかやりやすいということになるわけです。

二つ目が物資を送ることです。自治体では、市民からの要望に応えないといけないと思って、物資を送っておられるところもあるのですが、これも難しいです。まず、物資は、必要でないものも送ってしまう可能性があります。例えばよくあるのが、箱の中にごちゃ混ぜに入れたものです。これは、向こうへ行ったら開けられないです。使われないまま、大きな倉庫に置いているというのも聞きます。そう思うと、物資を送るのが本当にいいのかどうかというのは難しいところもあります。

あるいは、文具を送ると、向こうの文房具屋さんの商売が成り立たないとか、仕事が一つの復興のきっかけになるので、それで仕事が成り立たなかったら何をしているのか分からないという話にもなります。物資を送るというのは気をつけないと難しい面があると思います。

それから、三つ目がボランティアです。いま、70万人以上の方が行っていただいているのですが、災害ボランティアというのは難しいです。自分の好きなことを好きなとおりにやっていたらいいということではないので、通常のボランティアと違います。

よく言われるのが、被災者主体の活動をやらないといけないということです。被災者ニーズに応えるということと、自己完結型ということが言われました。特に初期のころです。自己完結型で、食べ物も、宿泊も、全部自分で手配して行って、向こうで活動して、そのまま帰ってくるというのが基本だと。

いま行けば、宿泊施設もあります。最初のころに行かれた方は、当然お風呂も入れないし、食べられるものもカロリーメイトのようなものばかりで、普通の食事は食べられないということがありました。あと、ボランティアに行きたいので、いきなり現地へ電話をしたりする人がいます。これは、迷惑でしかない。ボランティアに行きたいから、受け入れてくれと電話をするというのは、それはかえって邪魔をしているということになるということです。だから、自分で情報を得て行くというのが基本だと言われています。

東京では、個人で行けるボランティアバスが、まだまだたくさん出ています。関西はあまりないのですが、個人で行く方法はたくさんあると思います。ただ、肉体的な作業というのがどんどん減ってきているので、ボランティアセンターによっては、個人のボランティアは受付をしませんとい

う所も出てきています。岩手では、遠野まごころネットという一つの拠点がありまして、そこに登録すると沿岸部へ連れて行ってもらえます。そういうのがないと、これからどんどん行きにくくなるかなと思います。

あと、ボランティア保険は絶対に入るとか、自分勝手に動かないとか、自分の価値観を押し付けないということです。いったん何か経験をされると、例えば神戸ではこうだったとか、どこかの水害ではこうだったといって、地域によって事情が違うので、自分の価値観を押し付けないというのが大切です。それとか、現地の人と話をする機会があると、どうでしたかと聞いてしまうんですね。私たちも注意をしていて、話をするときは、向こうが話してこられたときは聞くようにしていますけれども、あまりこちらからは、地震のこととか、津波のこととか、ご家族のこととか、そういうことは聞かないようにしています。

８．写真で見る支援活動

写真をざっと見ていただきたいと思います。私が、最初に行ったのはゴールデンウィークのときです。さくらネットが、学生を連れて岩手に行くツアーがありましたので、それに便乗させていただいて、取りあえず現地に行きたいということで、７泊８日で行きました。

一関で降りて、気仙沼からずっと北上して沿岸部を初日に見ました。これは気仙沼の市役所の近くですが、この４月の終わりでかなり片付いている状態が分かると思います。がれきの撤去とか、トラックが入ったりしています（写真１）。

写真１

でも、ここまで津波が来ているんだなという状態は見れば分かります。港へ行くと、船が上がっています。それから、この沿岸部の道路は、北の陸前高田へ抜ける道があるんですけれども、ここはタンクが燃えて、大炎上を起こしていた所で、このときはまだ通行止めでした。ずっとそこから陸前高田の方へ向かって移動しているところです（写真２）。

写真２

写真３

陸前高田は、ここの道もやられていたはずなのですが、道の復旧は早いです。これは、自衛隊がすごく道路の復旧を早くやったというところです。電柱もこの辺は、もう１回立ててますね（写真３）。

これは、三陸鉄道の鉄橋です。この辺は、三陸鉄道も崩壊しています（写真４）。

写真４

ここも何度か通っていますが、これは陸前高田の中心部です。ぬれているのは、陥没していて、ちょっと低くなっているから

です。車がうずたかく積まれています。

陸前高田は、この時点では平地で、更地のような状態だったので、ある種きれいです（写真５）。

写真５

それが、釜石に入ったとたんに、がれきの山。ここは、まだ信号が復旧していなくて、交通整理をしているのが大阪府警の警察官です。

マスクとゴーグルをしているのは、ここはすごく粉じんといいますか、土ぼこりがかなりきつい。潮の匂いも、この当時まだしていました。町の中に入ると、土台だけがあって、家が流されています（写真６、写真７）。

写真６

写真７

学生を連れて、実際にボランティア活動をするのに、ボランティアセンターで、朝、受付をしているところです。この時にレジ袋を持っているでしょう、ボランティアが。これは、ボランティアを受付すると、いろんなグッズをくれるんです。中に軍手、ゴム手袋、マスク、それから、のどあめ、ティッシュ、ぬれティッシュ、カロリーメイト、これくらいが入っているんです。場合によってはタオルも（写真８）。

写真８

これは何かというと、全部救援物資です。見たらいろんな名前が書いてあります。別にボランティアはみんな、自分たちで持ってきているから、もらう必要はないんですが、ボランティアに配られているということは、避難所の方はものが足りているのかなという気がしました。

ただ、ここは大船渡ですけれども、聞いていると自宅で避難している人のところには何も届いていない。それは届けないというのが基本だというふうに聞きました。なぜかは分かりません（写真９）。

写真９

ここは引き込み線のところと同じようなところで、ごみ拾いなんですが、この中にはたくさん干物とか、そんなものが埋まっています。すごい魚の腐った臭いがします（写真10）。

これは、また次の日に公民館の駐車場の泥出しです。このときは、岩手の子の応援ということで学生を連れていったのですが、現地の状況によって自分たちがやりたいことができるわけではないのですね。事情が変わるので。（写真11）。

写真10

これは、５月３日にユニセフが企画した、被災地の子どもたちを被災地以外の所で１日遊ばすというプログラムに学生が参加しました。ここは、大槌町の親子さんがずっと来ておられて、いろんな体験をしながらやったということです（写真12、写真13）。最後に、神戸の企業が提供してくれたクッキーをお土産に持ってかえってもらっているところです（写真14）。

写真11

写真12

写真13

写真14

これは、カムバックサーモンの１期目で大槌町へ行ったときのものです（写真15）。大槌町というのは、４日間火事で中心部が燃えたそうです。すごかったらしいです。これは大槌川。これは大槌病院の所です。21人を連れて行きました（写真16）。

写真15

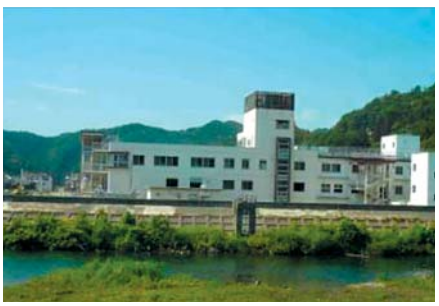

写真16

大槌川は、きれいな川です。まだこの日は暑くて、長靴で宝探しのようにごみを拾っています。川の中から何でも出てくるんです。家が１軒埋まっているようなイメージです。だから、例えばクーラーの室外機、洗濯機、テレビ、掃除機からドア、屋根のスレートとか、何でも出てきます（写真17）。

写真17

くぎが刺さったり、トタンで手を切ったり、そういう危険もあるということです。これが川から上がったもので、リレーでみんな出していました。初めて行ったときは、こういう作業をしていました。お昼は、途中のコンビニで買ってきたおにぎりを、みんなで食べているんですけれど、そういうので十分です。こういう作業を延々としています（写真18）。

ここは、大槌町の役場です（写真19）。小学校の隣に建っています。ここは、仮役場です。だから、仮設でこんな感じで避難しています。このちょうど上に社協がありまして、ここに災害ボラセンがあります。ここも仮設です（写真20）。

写真18

写真19

写真20

これは、９月23日から行った第３期のときの写真です。これは、大槌川の隣にある支流の源水川という川に入って、このときは何をやっているかというと、川底にたまったヘドロをすくい上げて、土のうに詰め込んで出しています（写真21)。実は、このときにサケが遡上しているんです。サケが遡上している中、こういう作業をやりました。

１期のときの３日目は川へ入らずに、お墓の掃除をやりました。ここが役場の近くにある江岸寺さんというお寺で、そこは山の斜面に向かってお墓があって、途中までは津波が来て流されています。そこのお墓の泥出し作業を、この日はやりました（写真22)。

写真21

写真22

これが被災した役場です。ちょうど津波の前に、ここにテントを立てて、町長さんとかが会議をやりかけたときに流されたという話です（写真23)。

写真23

これは小学校。これも燃えました（写真24)。

写真24

これは、役場の前のガソリンスタンドで、これは別のときに来たときに給油をしてもらったんです。ちゃんとした構造物が建てられないので、たぶん仮というかたちでやっています。足を使うポンプでガソリンをくみ上げて売っておられました。これも５月の連休ぐらいからやっているとおっ

しゃっていました。

ずっと大槌町へ入らせていただいているのですが、われわれが来ても何もできないですという話をしたら、忘れないで来ていただけるのがありがたいと言っていただいたんです。それが印象的な言葉です（写真25)。

写真25

この親子は、９月にさっきのGINGAで学生を連れていったときに、たまたま釜石の仮設住宅の所でお会いしたんです。そのときは、まだ大槌町にいるとおっしゃっていましたが、このときは、釜石のアパートに引っ越したということでした（写真26)。

写真26

実は、大槌町は、ローソンは営業しているのですが、スーパーは流されています。仮設住宅も中心部から８キロぐらい上流へ行ったところに多く建っています。だから、非常に生活が不便で、釜石の方へ引っ越しておられるんだろうと思います。

これは、先ほど話していた滋賀の学生を連れてきたときの写真です（写真27)。これは１日目。台風12号のときで、岩手は台風を避けたんですが、初日から帰るまでずっと雨でした。沿岸部を１日目に視察して、温泉につかりました。体育館にみんな寝ていますから、お風呂だけはこういう所へ毎日行くということにしました。体育館は、こんな感じです(写真28)。

写真27

写真28

学生は、滋賀県の学生だけが集まっているのではなくて、全国から来ている学生がごちゃ混ぜなんです。このときで200人来ています。夏休み期間中、全部で1300人の学生が来たということです。グループを分けて、仮設住宅にそれぞれ行き先が決まっていて、そこでみんな、お茶っこサロンという、サロン活動を通じて地域の人と触れ合うというのをメインの活動にやっていました。だから、どっちかというと生活支援に近いです。

これは釜石の、ある仮設です。ここに談話室みたいなのがありますので、学生が自分たちの手製でチラシをつくって、こんなんやりますからということで。これは、各期ずっと引き継いでいるんですけれども、チラシを持って、それぞれ来てくださいということを言って回っているところです。割と子どもさんたちは平気で来ます。１日遊んで帰るんです。(写真29、写真30)

写真29

写真30

これは、ご高齢の方も来てほしいということで来ていただいて、この方が学生にマッサージしてあげるわというので、こんなことで触れ合いをしました（写真31）。

写真31

これは、反省会ですね。毎夜、こういう反省会をしました（写真32）。最後の日には、これはもう出発前ですけれども、みんなのいろんな思いをこの中に込めて書いているところです（写真33）。

写真32

写真33

これで写真は終わりです。学生にとっては、実は非常にいい経験になったと思います。われわれも来年度以降はどういう応援ができるかなということを、これから模索をしていかないといけないと思います。バスで大量にボランティアを送り込むということではなくて、ＮＰＯの持っている自分たちのノウハウとか専門性を被災地の支援に役立てられないかなということを考えています。

ぜひ、生涯学習ということの中でも、こういう被災地のことも考えていただきたい。よく言われるんです。ボランティアバスを１回仕立てて行くのに50万円かかるんです。来る人には、宿泊費相当分だけしかもらっていないので、そんなに高いお金を出して、わざわざ行って何の役に立つのだということを言う人もいます。確かに費用対効果みたいな話をすると、そうかも分かりませんが、行った人が、またいろんなことで応援してくれる、東北のことを忘れないというのも一つだし、自分たちの行った活動を周りに広げてくれる、それによって、またいろんな機会を、その人たちが見つけてもらう一つのきっかけづくりにしていただけたらいいかなと。そういう信念を持ちながらやりかけたことです。

ただ、まだわれわれも素人ですので、本当にこれでいいのかどうか、自信は持てないんですけれども、そういうことでやっているところです。